

第四章 末摘花の物語 その後の物語

[第一段 末摘花への生活援助]

*祭、*御禊などのほど(まつりごけいなどのほど、賀茂の祭や禊の儀が近づく頃)、御いそぎどもに*ことつけて(その御準備の足しにという名目で内大臣たる光君に取り入ろうと)、人のたてまつりたる物いろいろに多かるを(要人たちの贈り物がいろいろと多く在ったので)、さるべき限り(気掛かりな女たち全てに)御心加へたまふ(援助を御加え為さいます)。*「かものまつり」は大辞泉に<京都の上賀茂・下鴨両神社の祭礼。昔は毎年陰暦4月の中の酉(とり)の日に行われたが、現在は5月15日。京都三大祭りの一つで、祭人の冠や牛車(ぎっしゃ)などをアオイで飾るところから葵祭(あおいまつり)ともいう。古くは「祭り」といえばこの祭りをさした。北祭。かもまつり。[季]夏>とある。十二支で数える酉の日は12日毎に廻り来るので、中(二番目)の酉は早くて13日で遅くて24日。光君は「卯月ばかりに(四月になったばかりに)」宮邸に再訪したのだから、その後2、3週内の話。*「ごけい」は平安期に<祭りの前日に齋院が賀茂川で行ったミソギの儀>とされる。現在は半ば観光用の行事として5月4日に社内の御手洗川で行われるようで、齋王代が手を洗って穢れ紙を水に流す式次第の連続写真が紹介されているWebsiteがあった。*「ことつけて」は「言付けて=言い訳にして=~の名目で」なので、「託つ」とほぼ同じだから<かこつけて>と言い換えれば済む。のだが、事情を整理する。光君は昨年8月に帰京して参議兼近衛右大将に復職した。そして大納言として10月に故院追善の大法要を執り仕切り、天災による世情不安を鎮めた。そして遂に本年2月に朱雀帝から冷泉帝に譲位され、冷泉帝の後見者たる光君は内大臣の地位に就いた。岳父の太政大臣は光君を貴種として奉っているので、事実上の最高権力者に光君はなっていたのである。その人に取り入ろうとするのは、言ってみれば万民である。

中にもこの宮にはこまやかに思し寄りて(中でもこの宮姫には細やかに心配りなかり)、むつまじき人びとに仰せ言賜ひ(側近の従者に直接ご指示なさって)、下部どもなど遣はして(下男たちを派遣して)、蓬払はせ(雑草を刈らせ)、めぐりの見苦しきに(外堀が崩れて中が丸見えだったので)、板垣といふもの(板を打ち立てただけで境堀に代える板垣というものを、取り敢えずの目隠しに)、うち堅め繕はせたまふ(屋敷の周囲に張り巡らして取り繕わせなさいます)。

かう尋ね出でたまへりと(内大臣がこうした打付け堀の家に御通いなさると)、聞き伝へむにつけても(噂されても)、わが御ため面目なければ(重責を担う立場上見つとも無いので)、渡りたまふことはなし(光君自身が宮邸にお出掛けなさることはありませんでした)。

御文いとこまやかに書きたまひて(その代わりに御手紙をととてもまめに差し上げ為さって)、二条院*近き所を造らせたまふを(二条院東隣に寝殿を新築なさって居らしたので)、*「近き所」については、「濡標」巻で内大臣就任直後二月末頃の近況として<二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。「花散里などやうの心苦しき人びと住ませむ」など、思し当てて繕はせたまふ。>と語られていた。そして三月に明石の姫君誕生を知り、すぐに母子をその新寝殿に呼び寄せたいと思い造営を急がせた、とあった。そして今は四月。さらに五月には、明石の姫君の御食い初めにお祝いを贈り、また花散里に通っては契った女たちを思うように新寝殿に配したいと、その完成を夢見る光君の幸せそうな描写が語られていた。此処は正に、その建築中の話なのである。

「そこになむ渡したてまつるべき(そこに御移し申上げる心算です)。よろしき*童女など(良さそうな下働きの子供たちを)、求めさぶらはせたまへ(探して雇っておきなさい)」 *「童女」のローマ字表記は「わらはべ」となっている。「童部」である。どちらも単に子供の意味で使うこともあるらしいが、此処ではどちらも<下働きの子供>の意味であり、違いは「童女」が<女の子>で「童部」が<男女問わず複数>なので、無難に後者を採用。

など、人びとの上まで思しやりつつ(使用人の事情まで配慮なさりながら)、訪らひきこえたまへば(援助の金品をお与え申しなさったので)、かく*あやしき蓬のもとには(もう今までのまともな食べ物もない耐乏生活を)、置き所なきまで(送らなくて済むのだと、恥も外聞もなく)、女ばらも空を仰ぎてなむ(女房たちも光明を得たということ)、そなたに向き喜びきこえける(二条院に向かって手を合わせました)。 *この「あやしきよもぎのもと」は<見苦しい貧しい暮らし>を屋敷の荒廃ぶりに重ねた凝った言い方、なのだろう。そして「おきどころなきまで」は、そんな暮らしに身を<置かなくてもいいので>ということになる。でも、それなら「ところなきまで」よりは「ところなしにて」の方が分かりやすい。尤も、「置き所なきまで」は<形を崩してまで=見栄も捨てて>の複意で「喜びきこえける」に掛かる洒落言葉なので、少々無理はご愛敬ではある。ただ、もしかすると「あやしきよもぎ」は文字通り<食べられるかどうか怪しい雑草>を言っている、とも取れる。と、その「下に身を置く」は<それでも其で食い繋ぐ暮らし>かもしれない。いや、むしろそう取った方が「ところなきまで」の「まで」を<しなくて済むように(まで)なって>と読み下せる。マ、<しなくて良くなって>と言ってしまえば、これも忽ち説得力を無くしそうではある。で、折衷案で解決を図る。

*なげの御すさびにても(光君にあっては、ほんの気紛れにでさえ)、おしなべたる世の常の人をば、目止め耳立てたまはず(在り来たりの普通の女には目もくれず声もお聞きにならず)、世にすこしこれとは*思ほえ(世間で少し此れは抜き出ていると思われていて)、心地にとまる節あるあたりを(どこか琴線に触れる所があるような相手を)尋ね寄りたまふものと、人の知りたるに(求めて近付きなざるものと、みな思っていたのだが)、 *「なげ」は「事も無げ」の「無げ」で<特別な事としてでは無い=如何と言う事も無い>。「すさび」は<気の進み=気の向くままの成り行き>。 *「おもほゆ」は「おもほゆ」に同じで<思はれる=思われている>。

かく引き違へ(このように打って変わって)、何ごともなのめにだにあらぬ御ありさまを(どの点に於いても人並みにさえ至らない宮姫を)、*ものめかし出でたまふは(大事そうに為さるの)、いかなりける御心にかありけむ(どういう御考えからなのでしょう)。 *「もの」は<それなりのもの>で、人なら<一人前>。「めかす」は「粧す」と当てるように<〜らしくする>。「いづ」は<意志を持って為す>。「ものめかしいづ」で<一人前であるかのように処遇する>だろうが、特に「いづ」の自動他動の言い換えが意外と厄介な言い回しで、理屈立つ逐語を避けてざっくりと文脈で言い換えた。ただ、こういう言い方をする作者の意図は幾らか見当が付く。光君は失政で失脚したのでもなければ、政治力を買われて復権したのでもない。悪い因縁に囚われて死に掛けて、そのまま都に居たのでは宿縁が切れないので他所に逃げたのであり、患者として席は剥奪されたが追放処分を受けたのでは無い。そして、神の導きによる天災で劫払いが出来て生まれ変わり、その神通力を求めた兄帝に都に呼び戻されて、結果として復権した形を見た。少なくとも其の蓋然性が整っていた。だから、不遇以前の契約は無効となった。相手が宮家でも無視出来るという、特別な立場を光君は得ていた事になる。だと言うのに、何を好き好んで「何事も並目にだに在らぬ御有様を物めかし出で給ふ」のか、という論法である。では、その問への答えを考えてみよう。取っ掛かりの注目点は、身分制度の縛りを外して考えたとしても、光君は一度関係した相手をお忘れにならない御性分、と語られている意味である。光君は女を利用して出世を図る必要の無い身分

なので、誰かに女を宛がうという発想も無ければ、実際にそういう事もしない。軒端の荻が近衛少将に付いても、空蟬が離れて行っても、気にはなるが地位利用で手を回そうとはしない。女の気は買いたいが、自由を束縛する気は無い。常陸宮の姫に誰かが言い寄るなら、それも一興。姫自身が発展家なら、それも一興。しかし、それが有り得ないほど姫は見劣りし、だというのに王家らしい慎ましさを備えていた。慎ましくては生きて行けない境遇に追い込まれているにも関わらず、王家の教えに忠実な生き方しか出来ない故に慎ましくしている姫に、光君は自分が守らなければいけない価値観を見せ付けられたのだろう。それが受領の台頭との対比で語られる所に、この時代のレポート・ドキュメントを見る思いがする。本文で、光君自身の言葉として語られてもいるが、自分以外に誰がこの姫の面倒を見るものか、が<何を好き好んで>いるのかという問への答えであり、その姫の価値観を守らなければならないと自覚する光君の王族意識の悲劇性と喜劇性が、少なくともこの姫の物語に於いてでの主題ですからねと、作者は示しているのだろう。だから、次のメの文を笑いながら言うのである。

これも昔の契りなめりかし(まあ結局は、是も前世のご縁なのでしょう)。

[第二段 常陸宮邸に活気戻る]

今は限りと(もう先が無い此処までだと)、あなづり果てて(呆れ果てて)、さまざまに迷ひ散り離れし上下の人びと(あかれしかみしものひとびと、去って行った上位下位の使用人たちの中には光君の援助で邸が整備されると)、我も我も参らむと争ひ出づる人もあり。

心ばへなど(気性と来たら)、はた(それはもう)、埋もれいたきまで(控え目過ぎるほど)よくおはする御ありさまに(聞き分けの良い姫に)、心やすくならひて(気楽に仕え慣れて)、*ことなることなき(宮家と違って儀礼の無い)なま受領などやうの家にある人は(実利一辺倒の受領などのような家に勤め替えした女房などは)、ならはずはしたなき心地するもありて(勝手が分からず間の悪い目に遭う事もあって)、うちつけの心みえに参り帰り(主人への忠誠心などない楽をしたいだけの場当たりの見え透いた気持ちで宮邸に勤め帰り)、 *「ことなることなき」は、今だと「殊なる事なき(特別の事のない)」に見えてしまう。が、それでは意味が通らない。なぜなら、「なまずりやう」は<つまらない受領、実力のない国司。>と古語辞典にあり、「殊なる事なき生受領」では<大した事のない実力のない国司>と重複修辞してしまうからだ。いや、日常会話ならこんな言い方は良くある。しかし、作者が此処でそんな無駄口を利くとは思えないし、何より是ではこの文の主旨が見えない。そこで「ことなる」を辞書で引き直すと、「事成る(事が起こる=事が在る)」という語があった。問題はその「事」が何なのか、だ。是は文脈を辿ると<姫に仕える事>になる。で、<姫に仕える事>と<受領に仕える事>との違いを考えると、<宮家>と<国司家>との違いだと分かる。で、<宮家に在る>が<生半可な国司家には無い>ものと考えてみると、「儀礼の作法」が思い付く。と同時に、<儀礼を欠く>「生受領」にあるのは<実利一辺倒の生活態度>なのだろうと対比する。そういえば、明石入道が中央貴族の真似事をするのが当時の常識からすれば、どれほど身分知らずの事で捻くれた意固地な姿勢だったのかが「明石」巻で何度も語られていたように思う。

君は(光君は)、いにしへにもまさりたる御勢ひのほどにて(以前に勝った御権勢ぶりの上に)、ものの思ひやりもまして添ひたまひにければ(姫の価値観への共感も改めて深く御持ちになり)、こまやかに思しておきてたるに(細かな所まで気を配り邸宅を整えなされたので)、にほひ出でて(故常陸宮邸には気品が甦り)、

宮の内やうやう人目見え(邸内に次第に人が多くなって)、木草の葉もただすごくあはれに見えなされしを(雑草が伸び放題で見苦しかった庭も)、遣水かき払ひ(やりみずかきはらひ、曲水を掃除して川を流し)、前栽の本立ちも(せんざいのもとだちも、前庭の花草の根元も)涼しうしなしなどして(すっきりと手入れをして)、

*ことなるおぼえなき(あまり働きを認められていない)*下家司の(この宮邸の家政管理者で)、*ことに仕へまほしきは(どうしても大臣家で出世したいと思う者は)、かく(このように内大臣が宮邸の修復に心を砕くのは)御心とどめて思さることなめりと見取りて(宮姫を気に入って御出でに成るからだろうと考えて)、御けしき賜はりつつ(姫の顔色を窺がって)、追従し仕うまつる(ついせうしつかうまつる、御機嫌を取って仕えています)。 *此処の「ことなる」は副詞「殊に(特別に)」の<形容動詞ナリ連用>。「覚え」は<上位の者からの評価>。 *「下家司(しもけいし)」は<下級の家司>とある。ところで「けいし」はそもそも、親王家・摂関家・三位以上の家を司る者とされ、仕える家が大きければ彼等の権限も大きい。逆に格式が高くても、実権のない家の家司は、身分はともかく実態は下男に近付く。その意味で、この宮邸が故常陸宮の遺産である限りは、此処の家司は皆が世間の評価として「下家司」にならざるを得ない。しかし、宮邸が内大臣の管理下に在るとなれば二条院の家司を上司に持つ「下家司」であり、働きによっては出世が見込める。この行はそういう事情の説明文、かと思う。結果として使用人は皆、姫を大事に持ち上げて仕える、という次第。 *此処の「ことに」も「殊に」。

[第三段 未摘花のその後]

二年ばかりこの古宮に眺めたまひて(ふたとせばかりこのふるみやにながめたまひて、二年ほどはこの旧邸で姫は淡々と御暮らしになって)、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける(その後は御移し申し上げたので御座います)。

対面したまふことなどは(それでも姫は光君と顔を合わせて親しく御話しなされることなどは)、いとかたけれど(とても出来ませんでした)、近き*しめのほどにて(隣の敷地なので)、おほかたにも渡りたまふに(日頃から殿は此方の院によく御出でになる時に)、さしのぞきなどしたまひつつ(姫の様子を覗き見なさったりしながら)、いとあなづらはしげにもてなしきこえたまはず(けして礼節を欠く態度は御取りなさいませんでした)。 *「しめ」は土地の領有を示す「しめなわ」のことで、「しめのうち」は<領地内・敷地内>。

かの大式の北の方、上りて驚き思へるさま、侍従が、うれしきものの、今しばし待ちきこえざりける心浅さを、恥づかしく思へるほどなどを、今すこし問はず語りもせまほしけれど、*いと頭いたう、うるさく、もの憂ければなむ。今またもついであらむ折に、思ひ出でて聞こゆべき、とぞ。 *この<ひどく頭が痛くて、面倒で、気が進まないの、後は省きます。>を真面に聞いて、この時に体調不良だったらしい語り部との臨場感に浸るべきなのだろうか。それとも、臨場感を演出する中断の仕方なのだろうか。いずれにしても、この姫の特異性と妙に符合する。

(2010年4月10日、読了)